
ベンチとコーヒー

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベンチとゴーヒー

【著者名】

Z0980B

【あらすじ】

男は最愛の女性に真実を告げられず、一人公園で何かを思う。ちなみにこれはBumponchickenの「ベンチとゴーヒー」をベースに書いています。

滾

一杯目 下手な嘘

朝早く俺は起きた。

ああ、
違う。
嘘だ。

眠れなかつたんだ

それでも、一睡もすることが出来なかつた。

いつも会社へ向かう時間だ。

僕の隣で、彼女が体を起した。

おは、おは、と目を擡て笑顔を作る

屈託の無い笑顔。

その笑顔に、心が痛む

業も笑つた。

つもりだつた。

七

「……とにかく、おまえのことは、おまえのところにいる」

笑えてなかつたのだろうか

「アーティスト」

「大丈夫」と。

僕はまた嘘を言つた。

何でも無くなかった

大丈夫じゃ、
無かつた。

朝早い朝ごはんを食べて、スーツに着替えて、僕は玄関に立つていた。

「行つてらっしゃい。頑張ってね」

彼女は小さく手を振つて、笑つた。綺麗に笑つた。

「行つてくるよ」

僕は、笑えているだろうか？

彼女がまた怪訝そうな顔をした。
上手く笑えていなかつたらしい。

彼女が何かを言おうと口を開きかけた。

僕は何かを言われる前に、早々に家を出た。逃げるよつこ。

向かう場所なんて、無いけど。

一杯目 下手な嘘（後書き）

BUMP OF CHICKENの「ベンチとコーヒー」を僕なりの解釈で小説にしました。BUMPの小説はこれで二つ目です。十話にも満たない数で終わると思うので、楽しんで頂ければ幸いです。

一杯目 穂の如何ともせかしさ

僕は駅前の公園のベンチに座っていた。さつき自販機で買った暖かい「コーヒー」を飲みながら。

もうすぐ、東の空から朝日が高く上るうとしている。徐々に、人の通りも多くなっていく。

僕の前を横切る人達。その数が多くなっていく。
だけど僕は、ベンチの上から動くことが出来なかつた。
いや、動くことはできるた。ただ、行く場所が無かつた。
簡単な事だ。

君はクビだ

たつたの一言が、人の人生を奈落の底へ突き落とす。
本当に簡単な事だ。

たつたの一年ちょっと働いて、新しい出来る社員が入ってきたらクビ。

別に何かミスをしたわけじゃなかつた。

それでも、僕はごみのようになつてられた。
彼女には、まだ言つてない。

言える訳がない。

僕の事を信じてくれている彼女に、どうして本当の事が言える?

リストラしたんだ

言える訳がない・・・。

「はあ・・・」

僕はため息をつく。つきたくなるさ。ため息の一いつやーつ。
昇る朝日が、僕を明るく照らす。

気が滅入るくらい、綺麗な朝日だつた。

お願ひだから、僕を照らさないでくれよ・・・。

怒りとか、悲しみとか、不安とか。そんな感情がじっちゃんになつて、更に太陽の光も相まって、僕に襲い掛かる。

・・・太陽の陽をこんなに眩しいと感じたのは初めてだ。

そんな事を考えながら、僕は顔を上げた。

上げて、周りに視線をやる。

僕がここにのんびりと座つている事が、段々不思議に思われる時間帯になつていた。

僕の前を通り過ぎる人達は、一様に僕に視線を向ける。

「何をしてるんだろう?」と言つ眼線は勿論、「ああ、アイツ・・・」

と、解つたような顔で通り過ぎていく人も居た。

僕は全てを悟られないように、隠れるように身を縮めて顔を伏せた。しかしそうすると、手に持つたコーヒー カップを見つめることになる。「コーヒーに反射した僕の顔はとても情けない顔をしていて、僕はコーヒー カップを振つてそれを見ないようにした。

ああ、と、呟く。

僕は、本当に情けない。

ふと、コーヒーから目を背けて駅の方を見る。

すると、スーツを着た一人の男性が目に入った。何故か、と言えば、彼のシャツのエリが立つていたからだ。しばらく目で追つていると、男性は、はたと立ち止まって襟を直し始めた。気付いたようだ。

ソレを見て、何故だろう、ズキン、と胸が痛んだ。

思わず、目を背ける。

背けて、「何でだ?」と呟いた。

何で目を背けた?と。

いや、答えは解つていた。

自分で見ていくように思えたから、だ。

周りを窺つて、隠れるように襟を正す。

あの姿が、今の僕にそっくりだった。

本当に、もじかしくてまいるな・・・。

いつもの僕はどうだ？

彼女の前では何時も格好つけて、強がって、子供みたいな屁理屈をツラツラ並べて粹がってる。

それでも、いつも焦つて、それを取り繕うために必死になつて、それでも、それを認めることはしない。

本当に、幼稚なんだ、僕は・・・。

何故だか、こんな時なのに、いつもの自分が冷静に判断できて恥ずかしい。いや、こんな時“だから”、か。

だけど、と思う。

ああ、だけど。

あの人が、

さつきのあの人気が、どうか、会社に間に合いますように・・・と。僕の分まで、何て、言わないけども。

一 杯目 襟の如何ともいかしさ（後書き）

二話目です。何か主人公が情けない感じになりましたが、気にしません。

ともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

三杯目 ボクサーと僕

さて、どれくらいこの時間が経ったのうか？

本当に時間が経つのも忘れて、僕はだたベンチにコーヒーを抱えて座っていた。

本当に、それだけ。

携帯電話をいじるでもなし、どこかを見ているわけでもない。本当に何もしていなかつた。

半分眠つていた、と言つても別に差し支えはないだろう。

ああ、いつもなら、今頃営業に回つている時間だな……と、歩

いているサラリーマンを見て思つ。

いや、本当なり、もつと別の

と、そこまで考えて、僕は頭を振つた。

いや、全て終わつた事だ。

仕事とか、そんな事以前の、まだ夢を持てていて、それが当たり前だつた頃の事。そんな事は今更思い出したところでどうなるものでもなかつた。

僕は更に暗くなつてしまつた思考を払おうと、ふと、重い頭を上げた。

そして目に映つた先。

昔、よく彼女と歩いた道が見える。

今、彼女の前の彼女とよく歩いた道。

その道を、一人の男性が走つていた。

並木道をジグザグに走り、何度も往復を重ねている。
シャドーボクシングをしながら、走る。走る。

ひたすら走って、流れるあせも、そして自分を見ている僕にも気付くことは無い。

恥ずかしくないのだろうか？と、ふと思つ。

僕は勿論の事、周りにも彼を田で追う人が多く居る。

その中で、必死になつてシャドーボクシング。

恥ずかしくないのだろうか・・・。

もう一度考えて、

いや、と首を振る。

気にしないのだろう。と。

人に見られようが、どう思われようが、気にしないのだ。

何故だらう？

何で、あんなに自信が出てくるのだろうか？
今は昼頃。決して人通りは少なくない。

そんな中を、何であんなに自信を持つて走れる？

あんな映画に出てくるような格好をして、手にテープингをして、
シャドーボクシング。

恥ずかしいとか、本当に思わないのだろうか？
もう一回考えたが、

やはり僕は頭を振った。

いや、と。

自問自答に区切りをつける。

信じているんだ。

僕は思った。

そうだ。信じている。

自分を。

自分が選んだ道を。

ボクサーになろう、と思っているのかは分からぬ。まあ、こんな時間帯にあんなことをやっているのだから、間違いは無いだろう。ボクサーになる。もしくはチャンピオンになる、といつ夢のための努力。

自分が選んだ夢への努力。

それのどこに、何を疑う事がある？

恥じる事がある？

彼はそう思っているのだろう。

だから誰に見られようが、何と言われようが関係ない。

何故なら、それが自分の選んだ道だから。

僕は思わず顔を伏せた。

・・・彼に対して、僕はどうだろう？

そんな事を考える。

目指した夢を諦めて、仕方なく選んだ進路先の会社に入社して、今、どうしている？

結果、どうなった？

この様さまだ。

本当に情けないんだ。

情けなくて、まいつてくる。

いつも格好つけて、強がつて、言い訛うなづく生きている。

無駄に悟つた降りをして見せて、それ以上を知らうとしない。努力もしない。

彼はきっと凄いのだろう。

僕には無いものを持っている。

この先有名にならずとも、自分の子供に自分の過去を胸を張つて話せるのだろう。

ならば、

と、僕は顔を上げた。

未だ走りシャドーボクシングをする彼を見、思ひ。ならば、どうか。

どうか、彼が試合に負けませんように、と。僕はコーヒーに視線を戻して、心の中で祈った。僕の分まで、とは、言わないけれど。

三杯目 ポクサーと僕（後書き）

ジャンルを“恋愛”に変えたんですけど、大丈夫でしょうか。駄目なようなら又戻します。

ころころ変わつて申し訳ありません。
ともあれ、楽しんでいただければ幸いです。

四杯目 黒と赤と僕と昔

僕は、アレだ。

本当はミコージシャンになりたかつたんだ。

高校の時はバンドもやってて、結構人気もあつたりした。

唄つた。

色々、色んな事を唄に乗せて歌いまくった。

けど、今、僕はこの様だ。

じゃあ、何を唄つていたんだろう?

結局、一体誰に唄つっていたんだろう?

それを僕は、ちゃんと解っているんだろうか?
解つていたんだろうか?

いや、

そもそも何を理解^{わか}つっているんだろう?

何だ・・・。

解らないけど、苦しかつた。
何か、諦めた何かが・・・。

「あはははは

「あはははは」

不意に、笑い声がした。

小さな、男の子と女の子の声だ。

自分が笑われたのかと思って、僕は勢いよく頭を上げた。
見えたのは、

一つのランドセル。

赤と青の一いつのランドセル。

小学生だ。どうやら、僕を笑ったわけではなさそうだ。
楽しそうに、向き合いながら笑顔で家路を辿っている。
仲の良い、一人なのだろう。

ああ、きっとそう。

不意に、黒が言った。

「きみがスキだよ」と。

本当にすんなりと、容易く言ってのけた。
ポカーン、と、なる僕。

呆然と、彼等が歩いていくのを見守った。
簡単に言つもんだ・・・。
と、心から思う。

僕はどれだけ気合を入れて、死にそななくらい鼓動を刻む心臓を抑
えて、彼女に告白したと思ってるんだ?
それを、簡単に言つてのけた。ガキが。ただの小学生だ。
一年生くらいだろうか。

全てをまだ見切れていない、そんな年の頃。

なあ、少年。

心の中で、あの子に話しかける。

人生そんなに簡単じやないんだ。と。

遠ざかる一人を見ながら、皮肉を浮かべた表情になる。
僕にも、そうさ。小さな頃に好きな子が居たんだ。
仲が良かつた。

一緒に帰りもした。

周りからも、“そういう一人”として見られてた。
だから、僕は言った。

「スキだよ」と。

彼女も笑つて、

「わたしもスキだよ」と言つた。

小学一年生の時だ。

本当に、嬉しかつた。

本当に、幼心ながらに嬉しかつた。

だけど、どうだ？

今彼女はどこに居る？

知らない。

どこか遠くなのか、結構近所なのか。さあ、どこで暮らしているの
だろう。

幸せにしてるのか、それともそうでもないのか。
解らない。知らない。知りうとも思わない。

なあ、少年よ。

「これから色々な事があるんだぜ？」

心から、黒い思念だけが浮かび上がって、心中で少年を追い詰める。

これからもずっと、その子と一緒に頑張れると想つてゐるだらう？
だけどな、そんなに簡単じゃないんだ。

これから、いろんな男が彼女の前に立ちはかるんだ。
それを、そいつ等全員を避けて、立つて、彼女を守れるか？

無理だね。

心中で、そう言い切る。黒い、暗い感情が心中で言葉を吐き続ける。もう、一人の姿は見えなくなっていた。

絶対に無理なんだよ。そんな事。

彼女だって、心変わりもするだらう。

気付いたら、隣に居なくなつていていた。

そうしたら、あとは泥沼だ。

顔を合わせるだけで、気まずくなつて、顔を背けてしまつ。

それは自分で、相手はなんとも思つてなかつたと気付いて、尚傷つくんだ。

なあ、少年よ。

僕は心の中であの子に話しかける。

それでもお前は、彼女を好きだと言えるかい？と。

僕は心の中で、少年に聞いた。

本当に、自分で冷たい声だと思った。

それでも、心の中の少年は、笑顔のまま胸を張つて言つんだ。

「ぼくは、きみがスキだよ」と。

僕を通して、彼女に向かって言つんだ。

屈託のない笑顔で、何も恐れることなく。

ああ、そうさ。

そうさ。 そうなんだ。

僕は目頭を押された。

一途なんだ。

本当に、呆れる程。

泣きたくなる程一途で、彼女を思つて、夢追いかけて・・・。

「すう・・・」

何かが溢れそうになつて、僕は息を吸つた。

あんな気持ち、どこにやつたつけ？

どこに、隠しちまつた？

格好つけて、強がつた。

アイツなんて、もう何でもないよ。と。
何だ？

大人気取りか？

素直な気持ちも言えない今まで、ヘラヘラ笑いやがつて。

ああ・・・。と、僕は顔を上げる。

あの子が歩いていった方を見て、

なあ。と、笑う。

なあ、少年よ。

頑張れよ。

彼女を一途に思つてやれよ。

頑張れよ。

彼女が好きなんだろ？

くじけないでさ、胸張つて彼女が好きだって、伝え続けろよ。

彼女が嫌になるまで、云えて云えて、馬鹿りじくななるまで云つてしま
れよ。

なに。

別に僕の分まで、とは、言わなければ

四杯目 黒と赤と僕と昔（後書き）

長くなりました。

主人公がものすごく浸つてます。

ただの妄想してる危ない人にさえ見えます。

昔の彼女とのやり取りが妙にリアルなのは気にしてはいけません。
ともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

五杯目 謝罪

暗くなろうとしている。

何とか、夕暮れがそれを引き止めている感じだった。
まだ、陽は落ちない。

何故だろう。

日が落ちるのが、少々悲しかった。

朝、あんなに億劫だつた太陽の陽が、今では別れが惜しい。
まあ、明日になれば、又日は昇るのだろうが。

僕は、どこで迷っているのだろう?
何を、今まで恐れていたんだろう?
誰に喰えбаいいのか?

本当に簡単な事だった。

自分自身に歌つてやれば良かつたんだ。
本当に、簡単な事だった。

ふと気が付くと、ベンチの周りにハトが集まっていた。
ずっとここに座っていた僕に、警戒心を解いたのだろうか。

だけど、

「ゴメンな・・・」

僕は謝つた。

ハトに向かつて。

馬鹿みたいだ。

「餓、持つてないんだ・・・」

ハトに向かつて咳きながら、僕は何かが胸の奥からこみ上げてくるのを感じた。

ああ・・・、多分、これ以上喋つたら泣く。

そう思つた。

なのに、

「ゴメン・・・」

僕は謝つた。

「お前等の役には、立たないんだ・・・。ゴメンな・・・」

謝つた。

ハトに向かつて。

いや、多分、ハトに謝つてるわけじゃなかつた。

きっと。

違う。

何か、今まで気付いてやれなかつた何かに、
気付いていても、見てみぬ振りをしていた自分の何かに、

きっと、今までの僕に、
今までの自分自身に、

ずっと、謝りたかったんだ・・・。多分・・・。
きっと・・・。

俯いた顔の下には、幾つかの染みが出来ていた。
ポツポツ、ポツポツ、と。

五杯目 謝罪（後書き）

謝ります。主人公。

パツと見、ハトに話しかける危ない人に見えなくも無いです。
ともあれ、短いですが、楽しんで頂ければ幸いです。

六杯目 当然だろ？～最終話～

陽が完全に沈んだ。

公園のライトがついて、下手したら昼間より明るく感じじる。
だけど、勿論違う。

太陽とライトでは、決定的に何かが違う。
同じように僕等を照らしているが、太陽とライトじゃ、何かが違う。
まあ、そんな事は当たり前なんだけども。

「いい加減・・・、帰るかな・・・」

もうそろそろ、いい時間だった。

朝からずっと握り締めていたコーヒー。

もう買った時の温もりは消えて、すっかり冷たくなっている。

僕はそれを一気に飲み干して、

「はあ・・・」

白い息を吐き出した。

白い息が僕の前に現れて、スウ、と消えていった。

何故か、その中に“アイツ”が浮かんだ気がして、僕は無意識に笑

つてた。

ああ、そうだよ・・・。と、暗くなつた空を見上げる。

アイツはコーヒーが好きなんだ。

本当は、気付いてるんだろうな・・・。

そう思ひ。

こんな一日の話を、きつと、笑つて聞いてくれるんだりうな。

こんな僕の単純な重いなんて、お見通しなんだりうな。

結局。

格好つけて、強がつて、そんな毎日を繰り返してきた。

それでもその実、全然駄目で、本当にまいるな・・・。

ふと、ライトの光を何かがさえぎつて、僕に影が被つた。
一瞬で暗くなつた視界に、僕は驚いて影を見る。

僕を照らすライトは僕の後ろにあつた。

だから、影は後ろに何かがあつて成り立つ。

後ろに、誰かが立つていた。

「シラウちゃん」

声がする。

いつもの、いつも僕の隣に居てくれる、アイツの声。

「ああ、ナオミ・・・」

僕は安心して、後ろを振り返つた。

ナオミが、笑顔で立つていた。

「コーヒーを二つかつて、一つを彼女に渡して、僕達はベンチに座つた。

「ずっとここにいて、退屈じゃなかつた？」

ふと、ナオミが言つた。

僕は口に含んだコーヒーを噴射しそうになつたのを堪えて、何とか飲み込む。

「ずっと見てたのか！？」

「え？あ・・・、えへへ・・・」

ナオミは照れるような、複雑な顔をしてコーヒーを一口。

それ以上、ナオミは何も聞いてこなかつた。

何も、聞いてこなかつた。

ここに居た理由も、何も。

いつもの顔でコーヒーを飲むナオミ。

こんな所に一日中いたら、僕が“どうなつた”かなんて、見当がつきそうなもんなのに、ナオミは何も聞かず、ただ笑つてた。

ふと、目が合つて、ナオミは一層笑顔になる。

僕もニッコリと、微笑んだ。

今度は上手く、笑えたと思う。

「いつものショウちゃんだね」

ナオミも、につこりと笑つた。

可愛い、綺麗な、真っ白な微笑み。

いつものナオミ。

いつもの顔でコーヒーを飲むお前と、

いつもの顔で、いつものように全然駄目な僕。

これからどうするか。

ずっと悩んでいた。

ベンチに座つて、色々なものを見ながら、ずっと。

で、答えは出た。

でもその答えは、まだ言わないで置こう。

明日でいい。

そう思ひ。

いや、別に、逃げる、とかじゃないんだ。

ただ、今はこのままでいい。

このまま、今はナオミと笑つてみたい。

だから、このままでいい。

あのサラリーマンは、会社に間に合つただらうか？
あのボクサーは、今でも練習を続けているだらうか？

あの少年は、あの少女に思いのだけをぶつけただらうか？

何。大丈夫さ。

落ち込むこと、悩むことがあったら、ベンチに座ってゆっくつロー
ヒーを飲むといい。

大事な人を思つて、考えればいい。

何か、大事な何かがきっと思い出せるから。

ほら、僕だつて思い出したんだ。

こんな僕だつて、ちゃんと見つけ出したんだ。

ん？ 明日からどうするかつて？

夢に向かつて進んでみるわ。

勿論、ナオミも一緒だ。

当然だろ？

六杯目 当然だろ？～最終話～（後書き）

最終話です。

が、本当は「いつこのHontoingでも良いんじゃないか」、と思つた最終話をもつ一通り考へてあるのです。

なのでもう一話書いつと思っているのですが、それはBUMPMediaを読んだ人じゃないと解らないと思うので、読みたい方だけ読んでいただければ幸いです。

実質的にはこの話が最後なので、何はトモアレ、楽しんで頂けていたのなら、幸いです。

裏六杯目 三人で（前書き）

BUMP OF CHICKENメドレーを読んでない人はいまいち意味が解らないと思うので、お引き換えしください。

この話は読まなくても支障はありませんが、どうしても内容が気になる方は、BUMPメドレーをお読みになつた後にお読みください。図々しくて申し訳ありません。

裏六杯目 三人で

陽が完全に沈んだ。

公園のライトがついて、下手したら昼間より明るく感じる。
だけど、勿論違う。

太陽とライトでは、決定的に何かが違う。
同じように僕等を照らしているが、太陽とライトじゃ、何かが違う。
まあ、そんな事は当たり前なんだけども。

「いい加減・・・、帰るかな・・・」

もうそろそろ、いい時間だつた。

朝からずっと握り締めていたコーヒー。

もう買った時の温もりは消えて、すっかり冷たくなっている。

僕はそれを一気に飲み干して、

「はあ・・・」

白い息を吐き出した。

白い息が僕の前に現れて、スウ、と消えていった。

何故か、その中に“アイツ”が浮かんだ気がして、僕は無意識に笑つてた。

ああ、そうだよ・・・。と、暗くなつた空を見上げる。

アイツはコーヒーが好きなんだ。

本当は、気付いてるんだろうな・・・。

そう思ひ。

こんな一日の話を、きつと、笑つて聞いてくれるんだろうな。

こんな僕の単純な重いなんて、お見通しなんだろうな。

結局。

格好つけて、強がつて、そんな毎日を繰り返してきた。

それでもその実、全然駄目で、本当にまいるな・・・。

ふと、ライトの光を何かがさえぎつて、僕に影が被つた。
一瞬で暗くなつた視界に、僕は驚いて影を見る。

僕を照らすライトは僕の後ろにあつた。

だから、影は後ろに何かがあつて成り立つ。

後ろに、誰かが立つていた。

「ショウちゃん」

僕はハツ、とした。
この声。

忘れるハズも無かつた。

昔、まだ夢を持っていた頃、よく聞いていた、大切な思い出の中の声。

聞いた瞬間、自然と涙腺が緩んでいた。

「アイカ・・・

振り返る。

そこには、遠いあの日に死んだはずの、前の彼女が笑顔で立つっていた。

二つコーヒーを買って、一つをアイカに渡して、僕はアイカと隣り合つてベンチに座つた。

死んだはずのアイカはあの日、最後に別れた日のままの姿で、僕の隣に居た。

だから、これが現実であるはずは無かつた。

でも、僕は特に何も考えずに、アイカの隣に座つていた。

「久しぶりだね」

アイカが言った。

「久しぶり、だな・・・」

アイカが死んで、もう三年になる。

だからアイカと会わなくなつて、四年が経つたといつことになる。

「元気?」

コーヒーから口を離して、アイカはこっちを見て言った。

「元気・・・かな・・・」

どうだろ?う?

元気ではないかもしだれなかつた。

が、僕は答えを訂正することも無く、コーヒーを一口啜つた。

「懐かしいね。この公園で、よくキヤツチボールしたね」

アイカの目線を辿つて、昔よくキヤツチボールをした場所を見る。

「ああ、お前いつも全然届きもしない方向にボール投げるから、苦労したよ」

「でも、ちゃんと捕つてくれたでしょ?」

そうだな・・・とは、口から出てこなかつた。

違う。

本当に受け止めたかつたのは、ボールなんかじやなかつた。
結局、本当に受け止めたかつたものは、僕の手から零れ落ちてしまつていてる。

夢も、アイカも・・・。

「ゴメンね・・・」

突然、アイカが謝つた。

僕は驚いて、アイカの方を見る。

「約束したのにね・・・。いつか又会おう、つて・・・」

言つアイカの目に、涙が溜まつてゐるのが見えた。

「約束、守れなくて、ゴメンね・・・」

顔を両手で覆つアイカの隣で、僕は彼女に何もすることが出来なかつた。

ただ座つて、心配そうにアイカを見ていた。

でも、

口は、勝手に動いてた。

「僕・・・、今彼女が居るんだ・・・」

「・・・」

アイカは何も言わなかつた。

僕は続ける。

「一緒に暮らしててさ・・・、結婚はしないけど、でも多分いつかすると思つ。彼女は働いてなくて、小さな部屋で僕の給料で暮らしてるんだ」

こんな事を言つても、逆にアイカを傷つけるだけかもしぬなかつた。でも、口は止まらなかつた。

「でも、僕、リストラしちやつてわ・・・。彼女に、それ、言えなくて・・・。今日こじで、ずっと座つて・・・、ずっと、考えてて・・・」

ああ、駄目だ・・・。

どんどん田頭が熱くなつていいく。

これ以上喋つちゃ駄目だ、と解つていたのに、何故だらう、やっぱり続けてしまつ。

「昔の・・・、お前と一緒に居た頃のさ・・・、夢・・・、思い出してさ・・・。何で、忘れたんだろう・・・、つて・・・。何で、ずっと思い出せないみうにしてたのかな・・・、つて・・・」

泣いた。

涙が出てきた。

それでも、僕は喋り続ける。

「多分、僕は・・・、お前が死んじゃつた事を理由にして・・・、夢を諦めてたんだ・・・。無理だつて・・・、アイツが死んだから、もう出来ない、つて・・・、そうやつて逃げてただけだつたんだ・・・。謝るのは、僕の方なんだ・・・。僕は・・・、何で・・・、うつ・・・、うつ・・・、と嗚咽が混じつてくる。こうなると、もう田舎が回らない。」

僕はしばらくそうして泣き続けて、

氣付くと、アイカは僕の前に立っていた。

「ショウちゃん」

僕を呼ぶ声はとても優しく、アイカは、笑っていた。

僕は涙を流したまま、アイカを見上げた。

「知つてたよ・・・」

と、アイカは言った。

「バンド、私のために活動休止してくれたんだよね？ショウちゃんは隠そうとしてたみたいだけど、私知つてたんだ・・・」

そうだった。

僕はアイカの病気を知つてから、バンドを一旦休止して、彼女に付き添うようになっていた。

「ショウちゃんは、優しいから・・・」

優しいから・・・と、アイカは繰り返した。

「ちゃんと解つてたよ。だから、あんまり自分を責めないで」と、アイカは言った。

「今、幸せでしょ？」と。

僕は何も言えずに、涙でくしゃくしゃになつた顔で頷いた。

「しあわせ・・・だよ・・・」と、小さく答える。

「それなら、大丈夫」

そう言うアイカの声が、徐々に小さくなつていった。

僕はアイカを見つめた。

アイカのからだは少しずつ薄くなつていき、闇に消えようとしていた。

「大丈夫だよ」と、アイカは言つ。

「ショウちゃんなら、きっと夢を掴めるから

だつて、と、アイカは笑つた。

頬に、涙が一筋伝つ。

「だつて、私が好きだつた人だもん」

アイカの実体が、もう見えなくなつていいく。

僕は最後、涙を飲み込んで、嗚咽をかみ殺して叫んだ。

「幸せだけど！お前の事は、絶対忘れないから！いつまでも…ずっと、ずっと忘れないから…！」

と。それから、

「必ず、いつの日か、また会おう！」

あの日の約束を。

いつか、又会おう。と。

また、会おうね

そんな声が、聞こえた気がした。

僕はミュージシャンの道を進み始めた。
決して順調ではないけれど、何とか彼女と一人で暮らしていく
る。

彼女はこの暮らしを受け入れてくれて、結婚も受け入れてくれた。
そして何と、妻は今子供をお腹に身籠つてくれている。
で、僕はその出産日に、今まさに遅れようとしていた。

簡単なTVの収録で遠くに行つている間に、子供が産まれそつだと連絡が入った。

当然収録をスッポかして、ダッシュで病院に向かつた。何度か赤信号も無視したが、そんな事は気にしてられない。

廊下を走らないで！といつ看護士さんの忠告も無視して、分娩室に向かつ。

と、

オギヤー オギヤー オギヤー ・・・

頃合を見計らつたかのように、中から声がした。

扉が開いて、看護士さんが赤ちゃんを抱いて出でくる。

「旦那さん、元気な女の子ですよ」

と、看護士さんが差し出されて、僕はひつたくるようにその子を抱きしめた。

眺めて、はた、と、思い出したように妻の元へ小走りで寄る。

「ほら！ 可愛い！ 女の子だつて！ 女の子ッ！」

「解つてるわよ・・・。落ち着いて・・・。ほら、赤ちゃんびっくりしてゐるでしょう・・・？」

妻に諭されて、「ああ、そудだな・・・」と息を整える。

「ああ、可愛いわね・・・」

妻に赤ちゃんを見せてやると、そう言つて微かに涙を流した。

「可愛いな」

僕も頷く。

「ね、名前、なんにするの・・・？」

妻が聞いた。

だから僕は前々から決めていた名前を堂々と言つた。

「ああ、愛に華つて書いて、『愛華^{あいか}』ってどうかな？」

と。

「うん、いい名前・・・」

妻は頷いた。

「よし、お前は今日から愛華だ」

僕は高々と愛華を掲げた。

高く高く、

掲げた。

これから僕は、何度も困難に悩まされるだろう。

だけど、大丈夫。

どんな時でも、隣に居てくれる人が居るから。

だから僕はこれからも三人で歩み続ける。

អាតិភាព

裏六杯目 三人で（後書き）

読む人によって解釈が異なる結末だと思います。
が、ソレは人それぞれということで、その人の中でバッドエンドなのかハッピーエンドなのかを決定してください。
トモアレ、これで完璧に最後です。
楽しんで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0980b/>

ベンチとコーヒー

2011年1月18日03時18分発行